

比較言語学の彼方

岸 本 通 夫

Apa trece, pietrele rămân.
水が流れて、石が残る。

1. 顧みれば、40年余りの昔、旧制高校の図書館で小林先生の御高訳のソシュール・言語学原論という書物に出会ったのが、私の言語学修行の手始めとなった。やがて間もなく書店の店頭を飾ることになった先生の御高著「言語学通論」(1937)の巻末に記されていることを、勉強の唯一絶対の指針と心得て、現代語では、英語・ドイツ語・フランス語の勉強と、古代語では、ギリシア語・ラテン語・サンスクリットの習得だけは、必須不可欠の条件と思い込みつつ、非才に鞭打つうちに、私の勉強の焦点は、やがて印欧語比較文法へ絞られていった。

ところで印欧語族の場合、いわゆる居住地の問題についてこそ、明快な断案が得られていなかったにせよ、インドとトルキスタンからヨーロッパにわたる諸地に分布する多数の方言が、インド=イラン語派以下の11の語派に整理せられて、それぞれが時間と空間の座標にしかるべく位置付けられている有様が教えられる。印欧言語学の示しているこの成果を見た日本人が、それでは日本語は、何語族の何語派に属するかと問いを発するのは、自然の情というものであろう。先学の教えに導かれて、いわゆるアルタイ系とされる諸言語すなわちモンゴル語・トルコ語あるいは朝鮮語などを学んでみると、いかにも述語動詞が一文を締めるといふ文構成の基本を中心として、中止形の発達等々、いわゆるアルタイ諸語と日本語との間には、構文法上の共通点が多く、従って、たしかにこれらは、日本人の近づきやすい言語であることは直ちに認められるものの、語彙素や形態素で明らかに日本語と対応すると認められるものが容易に多くは見出し難いこともすでに昔から言われているとおりであることを確認するのみであった。

さて、数えればはや20年をこえる以前のことになるが、数年間にわたって言語学概論の講義を担当したことがあり、テキストとして大野晋氏の「日本語の起源」(岩波新書)を用いさせていただいた。年毎に繰り返す講義なので、読み進むうちにやがてその都度、同書p.140以下の、いわゆるアルタイ諸語と、印欧語との特徴を対比したくだりに差しかかることになるのであるが、ここはどうしても大野氏の説いておられるところに若干の反論ないし修正を加えて、この部分だけはそのままのみにしないようにと、聴講する学生の注意を促さざるを得ないことになる。例えば、印欧語の特徴の一つとして、冠詞のあることを挙げておられるが、印欧語の方言の中には、冠詞を全く欠くものも少なくないので、こういう点はやはりはっきり指摘しておくことが必要であった。もっともこの数頁に挙げられた印欧語とアルタイ語との相異の12項目は、大野氏自身の見解というよりは、藤岡勝二博士の創唱せられたところが東大言語学科の定説と化したもののごとく、私自身も、在学中小倉進平教授の言語学概論の講義において同じ趣きを拝聴した記憶がある。

話が枝葉の方へそれたが、実はそうした経緯よりも、毎年一度は、いわゆるアルタイ諸語——それも日本語も含む広い意味のアルタイ語と印欧語との類型上の特徴の比較対照を試みることを繰り返すうちに、アルタイ諸語と印欧語とは、言語類型という観点から大局的にと

らえるならば、異なるよりはむしろ相通ずるところも少なくないと言うべきではないかと考えるようになったことを申し述べたかったのである。印欧語の古い方言は、文中における語の配置が自由であったというのが、通説のようになっているが、はたしてこれは動かしがたい事実であるか。

いかにも上の通説は、決して根拠なくして言われているわけではなく、ギリシア語・ラテン語・サンスクリットの古典ないし古代の言語、あるいは近代の言語でもロシア語などでは、確かに語の配置が自由であり、さらにゲルマン諸語やロマン諸語の場合でも古くさかのぼるほど、必ずしも SVO の語順に従わない例が多く見出だされるという事実もある。それにまた、印欧語の古い方言は、豊富な語尾屈折をもっていて、各語の語形自体だけで十分にその語の文中における機能を表わすので、文中の語の配列を組み替えても、文意の誤解の生ずるおそれがなかった。“Paul bat Pierre.”の意味を“Pierre bat Paul.”と表現することはできないが、“Paulus pulsat Petrum.”ならば、この文をつくる三つの語をどのように並べ替えても、意味のとりちがえの心配はなかったのである。

かように古代の印欧語方言は、各語がそれぞれに自律性 *autonomia* をもつというその文法構造のゆえに、文中の語の配置は、これを随意に操作することができたので、古典文学のすぐれた作品などにおいても、この可能性が文体上の効果のために存分に活用されていることは、あまねく知られ、認められている通りである。しかしながらこれを、古代の諸方言よりはさらにもう一段古い過去にまで無造作にさかのぼらせて、印欧共通基語でも状況が全く同様であったもののように思い込んでしまうのは、類推の行き過ぎではあるまいか。

ほとんどすべてが散文で書かれているボアズコエイ文書のヒッタイト語の場合、あるいはシャタパタ=ブラーフマナなどの古いヴェーダの散文の場合、おおむねは述語動詞で閉じられるパターンの文が重畳と繰り返されて、どこまでも続き、この点に関するかぎりは、いささか単調の感じさえ免れない。少なくとも文学的な技巧の要求される抒情詩などの韻文の場合でないかぎり、日常の口語体では、印欧共通基語の文構成は、日本語ないしアルタイ諸語と同様に、述語動詞で一文をしめくくるのが常態であったのではないか。

印欧語がもともとは屈折型の言語であったことは周知の通りであるが、その屈折が名詞系・動詞系の別なく共に語尾屈折であったこと、および語構成等のための語根の拡張にも、基本的にはもっぱら接尾辞が用いられていたことも、類型学上の関連を媒介として、印欧語の文構成が元来は述語動詞で閉じられるのを常態とするものであったことを示唆しているように判断される。

ここにおいて、中国語・マライ語、述語動詞から文が始まるのが元来は常態であったかと思われるセム諸語やハム諸語、名詞の類別という独特の文法現象で特徴づけられるバントゥー語族などのアフリカの諸言語等々、世界の言語が豊富な多様性を示していることに、改めて思いをいたしてみるならば、印欧語といわゆるアルタイ諸語とは、その文法構造を大局的にとらえる立場からは、むしろ類型的な意味では相通ずるところがあるということもできるのではないか。

ところで、アルタイ諸語との類型上の相似が古くから問題にされて来たウラル語族の場合はどうであろうか。この場合も、少なくともその共通基語においては、文構成は、述語動詞で結ぶのを基本とし、語構成も接尾的構成を本来の型としたものと判断してよいように思われる。そこで今度は視線を東に転じて、東アジアの言語すなわち、いわゆる古アジア諸語などの場合を見てみると、アイヌ語や米大陸の極北の地域を占めるエスキモー語まで含めて、

これらはすべて同じ類型の言語と見ることができるようである。そうするとユーラシア大陸の北半は、緯度にして180度をこえる延長にわたって、大局的には同一類型に属すると判断される言語で、ほぼおい尽くされていることになろう。この事実を、偶然の一語で片づけて屈託のない人はそれでよいが、私には、軽々に見過してはおけない一つの問題のように思われた。

さてそこで、ここに一つの、解決の要求される問題があると認めた場合の、おそらく古典的と呼んでもよい解決の方向は、すべてこれらの、東はエスキモー語から、アルタイ・ウラルの諸語を経て、西は印欧語にわたる多くの言語の根元に、印欧共通基語をもはるかにさかのぼる遠古の共通基語を想定し、旧大陸の北半部をおおうて分布する問題の諸言語を、互いに方言同志の関係にあるものと解釈することであろう。一まずこの方向に解決の道を探ることを目標に立てて、想定しようとする共通基語に仮にユーラシア共通基語の名を与え、「ユーラシア語族試論」とも称すべき小論の草稿をまとめたのが20年ほど前のことであったが、幸にもこの稿は、郷土の知己の諸兄の温かい理解のおかげで、1971年に至って「ユーラシア語族の可能性」の表題のもとに一書の体を為すことができた。

2. しばしば引用される1786年のカルカッタ・国立アジア協会におけるWilliam Jonesの講演以来、2世紀近い才月が流れた。1878年のK. Brugmannの「青年文法学派」宣言から数えるならば、1世紀が経過した。印欧言語学の場合を典型とし、共通基語と方言という概念を設定して、その前者から後者に至る間の通時相の展開してゆく過程をかなりの程度に説明することのできた比較文法を古典的と称しても著しく適切を欠くことはあるまい。印欧語族においてまず確立せられたこの古典的比較言語学という方法は、セム語族の場合、ウラル語族の場合、マライ=ポリネシア語族の場合、パントゥー語族の場合、等々に用いられて、確かに豊かな成果をあげて来た。あえて私が「古典的」と銘打つことを提唱しようとするこの方法に私がまみえたのは、この一文の冒頭にも記したように、今を去る40年ほど昔のことである。無論私は、素直にそれを信じた。信じる、信じないなどというよりも、私にはそれがすなわち、言語学そのものであったのである。そしてまた、共通基語から諸方言への分化というこの古典的パターンを信じていればこそ、日本語の系統問題についての答えも、当然その方向に求められるべきものとして、日本語や印欧共通基語等々の、はるかに遠く古い根元に仮にユーラシア共通基語と名付ける一つの共通基語を考えてみようとしたのであった。

しかしながら、古典的比較言語学のみを唯一絶対の方法と信奉しているかぎりでは到底打開することのできないような事実が次第にあちこちで問題になり始めているように思われる。古典的比較文法の *aporia* ともいうべきその種の事実または問題の二三を以下に挙げてみると――

1) 昨1978年秋の関西外大における日本言語学会大会の「古代エジプト語系統論の近況」と題する講演において、矢島文夫氏がセム語とエジプト語との間に容易ならぬ問題の横たわっていることをあらためて注意された。さかのぼれば事実そのものは、すでに Th. Benfey や C. Brockelmann 以来、問題にされて来たところであるが、ハム語の名で総称されるエジプト語・ベルベル語・クシュ諸語等の北アフリカの言語と、セム語との間には、i) 接頭辞 *m-* がしきりに用いられる。ii) 女性形をつくるのに接尾辞 *-t* が用いられる。iii) 子音が語彙素を形成する。iv) 動詞の使役態が接頭辞 *s-* (š-) でつくられる。v) 強調音 *em-*

phatica と称せられる特異なる音を音素としてもつ、等の共通の特徴が見出だされる。北アフリカと西南アジアという隣合せの地帯に、これだけ顕著な特徴を共有する言語の分布しているところを目の前にすれば、だれでもこれらの言語の根元に一つの共通基語を想定したくなるというものであろうが、さて一步を進めようとする、そこには何とも奇妙な事態が人を待ち構えている。例えば、エジプト語の三人称単数男性の接尾辞 *-f* のような、どこにも対応する類例のない不思議な形態素が比較言語学をあざわらうかのように姿を現わす。エジプト語の *mu* “水” に対するヘブライ語 *mayim*、アラビア語 *mâ* “水” のように、対応する語彙素も決して皆無ではないものの、印欧語族やマライ=ポリネシア語族の場合のように、セム=ハム語族の概念を定立するには、語彙素の面における対応も、そのあまりにも乏しいことがだれの目にもただちに明らかになる。さればとて、セム諸語と、いわゆるハム諸語との間に見出だされる上記のような形態と音韻の両面にわたるいくつかの共通点を偶然のたわむれに帰することは不可能であろう。

しかも、さらに謎を深めようとするもののように、チャド諸語の一群がここに加わる。チャド語とは、チャド湖からニジェール川中流に至る地帯に分布するハウサ・コトコ・ファリ等々の諸民族の言語であるが、これらの言語の用いる一連の人称接尾辞とセム=ハム語族の人称接尾辞との間には、紛れようのない対応が認められ、なお使役態の形成に形態素 *s* が用いられる事実および *m-* 接頭辞がしきりに用いられる事実をハウサ語の文法に指摘することができる。ところが、ハウサ語の *-s* は、接尾辞であって、セム語・ハム語の使役の *s-* のように接頭的に用いられるものではないことがまた一つの問題であろう。

偶然の一致として見捨てておくことは到底できず、そこで確立された手順に従って、セム語と、いわゆるハム諸語と、チャド語との基底に一つの共通基語を求めようと作業にとりかかる古典的比較文法は、たちまちにして進むことも退くこともかなわぬ *aporia* に引き込まれてしまうのである。共通基語から諸方言への分化という古典的パターンに固執して、上の諸方言から一定の共通基語を絞り出そうとするかぎり、おそらく試みはついに不毛に終るのではないか。

2) むかしチベット語は、ビルマ語・中国語・タイ語等々と共に、シナ=チベット語族をなすものとされていたが、この通説に疑いをさしはさむ声次第に大きくなり始めているように見えるのは、むしろ歓迎すべきことであろう。

たしかにシナ=チベット語として一括されて来た諸言語は、中国語北方方言の四声を始めとして、声調と通称される音節単位の音調をもつというかなり特異な類型上の特徴を共有するのみならず、数詞・代名詞を含めて、相当数の語彙素にわたって、明らかな対応も認められる。ところが、これらの諸言語のうち、チベット語やビルマ語などは、中国語の SVO の語順とちがって、文構成の型は、述語動詞が文の終りに来るパターンに従い、その上に疑似中止形とも名付けるべき一種の動詞形がよく発達していて、文の流れのリズムがいわゆるアルタイ諸語の場合とえらぶところがないような感じをいだかせる。

中国語の地域とトルコ語・モンゴル語の地域とのちょうど中間ではないにしても、ともかくその双方に隣接する地帯に、一方では中国語との関連を否定することができず、しかも一方、典型的には、いわゆるアルタイ語とよく似た一面を示すチベット語等の言語が見出だされることは、古典的比較文法の立場を貫こうとするかぎり、あいだには中間的な型の言語が見出だされるものであるとか、影響を被ったのであるといったような説明で手軽に片付けておくわけには行かないので、まことに不思議なこととするほかない。仮にシナ=チベット共

通基語なるものがあつたとすれば、それは、孤立型の言語とされる中国語等の共通基語であるから、文構成における語順は、重要な機能を果たしていたはずで、おそらく SVO の語順がかなり動かしがたいものであつたであろう。このような言語において、その一部の方言、すなわち、のちのチベット=ビルマ語派を形成するべき方言において、他の言語の影響を受けたものとしても、具体的にはどのような過程を経て語順の変容が起こり得たか。

チベット語等の一群の方言の示す以上のような不思議について、私自身も一つの試論を公にしたことがあるが、いわゆるシナ=チベット諸語を専門とされる西田龍雄・橋本萬太郎の両氏が、それぞれに問題を取りあげ始めておられるので、詳しくは両氏の論考にゆずりたい。私としては、古典的比較文法の常套では片付かない問題の一例がここにもあることを認めていただければ今は足りるのである。おそらくこの種の例は、まだまだ積み重ねることが不可能ではなからう。いわゆるシナ=チベット諸語のほか、東南アジアには、モン=クメル語族や、ヴィエトナム語（越南語、安南語）とムオン語との一群など、名詞・動詞の格変化や人称変化が貧しい等の類型上の特徴は共通にしながら、系統上の関係については明快な結論の下しにくい一群の言語があり、あるいは、アフリカにおいても、名詞の部類別と複音節的音調というこれも類型上の二つの特徴を共有しながら、やはり一つの共通基語からの分化というパターンでは説明の困難な多様な言語群が、バントゥー語族のほかにいくつも見出される。印欧語族やセム語族の場合のように古い時代の資料に恵まれていないので、各方言の言語史の詳細を追跡することができないことを理由に、これ以上の探求を断念するのも一つの道かもしれないが、どうもそういうことでは片付かないように思われるのは、上に挙げた多くの場合に、植物相 flora の漸移 *transitio* に似た地理的分布が認められることである。上述したように、チベット語が中国語とアルタイ諸語との中間型ともいべき相を示しているのがその一例であるし、ヴィエトナム語の帰属が古くから問題になっているのも、声調と単音節的という特徴では中国語とのつながりを示しながら、一方、語彙の対応においては、明らかにモン=クメル語族との関連を否定することができない。あるいは上にいささか触れるところのあつたハウサ語などのチャド諸語も、一方ではセム語・ハム語につながる形態素をもちながら、同時に、赤道以南のアフリカの諸言語を特徴づける複音節的音調の現象にも事かかない。もっと大きいスケールで類型上のいくつかの特徴が段階的に次第に濃淡の度を変じて行くのを地図の上にたどることのできる例もある。一つは、私が仮にユーラシア語族の名で包括する可能性を探ってみようとした旧大陸の北半に東西方向に分布している諸言語の場合であり（掲稿の拙著「ユーラシア語族の可能性」についてみられたい）、もう一つは、橋本萬太郎氏が、「言語類型地理論」（1978）において、細部にわたる類型上の諸点について指摘しておられる東アジアの諸言語の南北方向における漸移の相の事実である。

印欧語族からウラル語族・アルタイ諸語……を経てエスキモー語にいたる諸言語の場合は、まだしもそれらの基底に、私が仮にユーラシア共通基語と名付けたような言語を一応想定してみることも不可能でもないが、問題が、クメール語やヴィエトナム語から中国語を経て、アルタイ諸語にまでまたがっている東アジアの南北の言語の場合は、もはやこれらの諸言語の関連如何というこの問題そのものが比較言語学の枠組をはじめから越えているわけである。チャド諸語を間にはさんで、セム諸語・ハム諸語とバントゥー語族等の示している事実についても、ここに一つの問題があることを認め、その解決を志すかぎり、共通基語から諸方言への分化という比較言語学の基本前提は、はじめから棄ててかからねばならないはずである。

3. 明らかに、かつまた確かに、一つの共通基語からいくつもの方言への分化というパターンには、どうしても乗せ切れない言語事実が存在し、しかもそれが決して一二の例にはとどまらないことを、何はともあれ、まず見届け、見定めておきたいと私は思うものであるが、しかしさればとて、勢いに任せて古典的比較文法の弔鐘を打ち鳴らそうなどと大それたことを目ろんでいるものではないこともここに一言だけは書き添えておきたい。

印欧語族の場合、あるいはセム語族の場合、(そしておそらく、フィン=ウグル語族・マライ語族=ポリネシア語族・バントゥー語族の場合も)、それぞれに様々の、大小の問題をかかえてはいるにしても、一つの共通基語を想定して、ある限度までは、具体的にその共通基語の再構成を試みることができる。ロマン語諸方言の共通基語として考えられる俗ラテン語の場合、その具体性は一層確かなものであるし、今日の日本語の諸方言の基底に、ある程度まで均質で様な一つの共通基語を想定するのも決して不合理ではあるまい。このほか、チュルク語諸方言の場合、モンゴル語諸方言の場合、あるいは印欧語族の中で、ゲルマン語派やスラヴ語派の諸方言の場合等々、よく限定された一群の方言について、裏返していえば、まさに「比較言語学とは、所詮循環論法に過ぎないではないか」という批評を受けるような場合において、一つの共通基語を出発点とする方言群の成立という古典的比較文法の基本的な考え方と方法が有効であり、多分そのような実例は、それはそれで、いくらでも挙げる事ができるものと、私は信じているのである。こうした考え方にとどめを刺し、完全に抹殺しようと試みるつもりであれば、古典的というような美称は奉らなかつたはずである。

4. しかしながら、いうまでもなく当面の問題は、そのような古典的な発想や方法では、何とも歯の立てようのない言語事実のあることを指摘し、確認し、これを言語学の一問題としてとり上げる事、かつ当然のことながら、そのような問題に切り込んで行く道をたずねることである。

いわゆるアルタイ諸語と中国語との間に立つチベット語・ビルマ語等の、言語類型上のいわば折衷的ともいうべき性格、あるいはハム諸語とバントゥー語族等との間に、チャド諸語の一群を置いてみた場合の、そのチャド語諸方言の同じく折衷的・中間的な性格を解釈し、説明しようとするとき、または、東アジアにおいて、南から北へと相連なって分布する諸言語について橋本氏の指摘された類型上の漸移的 *transitionalis* な様相を問題にしようとするとき、おそらくだれの頭にもまず浮かぶのは影響 *influentia* という言葉ではなからうか。影響の一語で片付けてしまつて、それ以上は進めようとしなにかぎりでは、曖昧かつ無責任な表現と評し去るほかないが、手軽に影響と称されている事柄の実体を組織的・方法的に見きわめて、影響という概念そのものを精密なものにしてゆく道があらう。普通に言語間の影響といえば、まず語彙の流入が挙げられ、次いでなぞり *calque* (例えば、*sky-scraper* という英語をうつして、「摩天楼」や *gratte-ciel* といった新語が、日本語とフランス語にそれぞれ生ずる) の現象がとり上げられるが、二つの言語の間に起こる一方の他への影響という現象は、どのように捕らえて問題にしてゆけばよいものであるか。端的に言つてしまえば、二言語併用者 *bilingues* の大脳言語中枢において生ずる二つの言語体系の間は一切の干渉現象 *interferentiae* と規定しておけば、もつとも包括的にあらゆる場合を含み得るかとは私は考えるのであるが、ともかく一まずかような規定を設けておいて、この意味の干渉が、問題の二言語の相互関係 — 互いに近い関係の二方言か、かなり遠い二方言か、全く異系統の二言語か — を始めとする多種多様な条件に応じて、言語のどのレベル

まで — 音韻体系、意味と語彙の体系、構文法・語順、形態法等 —、かつまたどの程度まで及び得るものかを、具体的な実例を集めながら、組織的に考察を進めてゆくことが必要な作業の第一歩であろう。実はこの方向へ向かっての研究はすでに着手せられているので、この方面の最初の研究者および研究かと思われる U. Weinreich, *Languages in Contact*, Den Haag, 1962 を挙げておきたい。

次に、二つまたは二つ以上の言語集団の接触という歴史上の事件を背景にして、相互の理解と意志疎通の必要から、混成(言)語 *lingua mixta* と称せられるものの成立を見ることがある。すなわち、*Lingua Franca* や *Pidgin-English* の場合である。この種の言語現象については、浮草のように不安定な *sabir* 型の混成言語と、少なくとも日常の口語としては定着するところまでは至っている *créole* 型の混成言語とを一応区別して考えることが適当なようであるが、特に、フランス語や英語の語彙をギニア湾周辺のアフリカの言語の文法に載せて話されているともいわれるクレオール諸言語の詳細な研究は、例えばチベット語などの成立について、あるいは何らかの光明を投じてくれる可能性があるかとも期待される。

順序がやや前後する観があるが、上に述べた言語干渉の現象の具体的な研究の、おそらく古典的なものと称してよいかと思われる Kr. Sandfeld: *Linguistique balkanique*, Paris 1930 を忘れてはならない。確かに印欧語族の方言にはちがいないものの、バルカンの諸言語 — すなわち、現代ギリシア語・アルバニア語・ロマン語の一つであるルーマニア語および南スラヴ語派の諸方言(ブルガリア語・セルボ=クロアチア語・スロヴェン語・マケドニア語)は、互いに近い関係にある南スラヴの方言は一括して考えることにすれば、印欧語族の四つの語派としてすでに著しい分化を遂げたのちの段階で、バルカン半島において互いに接触を保ちつつ、影響を及ぼし合うようになり、言語における干渉現象の研究のためには極めて興味深い材料を提供している。Sandfeld が礎石を置いた研究を拡充してゆくことは、われわれの問題を考える上で、極めて有益であるばかりか、むしろ必要欠くべからざるところでさえある。

最後に、われわれの日本語自身の語史研究の重要性をとり上げて、この小稿を結びの方へ運んでゆこう。E. Polivanov と泉井久之助教授の先 をうけて、村山七郎教授は、近年の精力的な研究によって、日本語の形成せられて来た過程において、マライ=ポリネシア語(族の某方言)が少なからぬ役割を演じていることを明らかにせられた。従来は — 例えば、私の「ユーラシア語族の可能性」にしても — 古典的比較文法の発想の枠組の中で、日本語は何語族に属するかという形で、もっぱら系統論の立場からのみ問題が論ぜられて来たのに対し、大胆に「日本語は雑種言語 *hybrid language* である」と言い切って、日本語の成立過程を、系統論 *genealogia* よりも形成論 *geneseologia* の問題としてとり上げられたところに教授の業績の画期的な意義があると私は考えるものである。ただし教授は、一方ではまた Polivanov と共に「およそ世に雑種言語でないような言語はない」といった趣のことも述べておられ、それならば何も特に日本語だけを取り立てて雑種言語扱いされることはないわけで、教授の考えておられる雑種言語の概念については、なお曖昧なものがあるように思われる。言語学の課題が、系統論から形成論の方へと切り換えられるのは、歓迎すべき一つの進展にはちがいないが、これに伴って、一方では、旧来の語族の概念そのものもやがては再検討が必要になろうが、同時にまた、雑種言語とは何か、言語の混合とは何かといった概念規定も問題にされることになる。言語における干渉現象の研究は、まさにそう

した問題の核心へ向かって、確かな事実を手掛りにしながら迫ってゆこうとするものにほかならないからである。

ところで、最近はまだ、先年来ニューギニア島の言語に着目して研究を進めて来られた江実教授が、ついにパプア湾の沿岸に、文法類型と語彙の両面において日本語と共通するものをもつらしい言語を認められたことが毎日新聞に報ぜられた(1979年 2月と3月)。トアリビ語その他のこの方面の言語と日本語との関連についての詳細は、今後の課題であろうが、日本語もまた日本文化と同様に、南の島と北の大陸から幾たびかにわたってもたらされたものによって重層的に形成せられたものという可能性はありえよう。すべてはなお今後の一層詳細な研究にまつほかないが、日本語は、形成論の立場からの研究のためには絶好の素材であるかも知れないのである。

日本語の研究が、干渉現象の究明と形成論の確立とに寄与すると期待されるもう一つの側面がある。それは遠い国の言語をたずねて、はるかな史前の言語史の再構成を目ざす方向とは全く対照的に、いま現にわれわれが日日用に供しているいまの日本語そのものを素材にとり、これにわれわれ自身の省察を加えて、言語干渉の一つの場合を見きわめることである。明治以来の西洋文化の摂取という文化史の事実と表裏をなして、おびただしい量の西洋語の文献が、文化のあらゆる領域にわたって翻訳されたばかりか、実に多くの日本人が英語をはじめとして色々の西洋語を学んだ。西洋語を日常の用に供するに至った人は多くなかったにしても、翻訳調という一種の文体の成立そのものが、まさに言語干渉の一つの場合にほかならないではないか。そして事実、西洋語の影響は、語彙の流入やなごりによる新語の誕生の程度にとどまらず、ほんの一例を挙げてみるだけでも、1) 後置詞(または格助詞)の「より」が、比較級を直訳するための用語として、先行するべき体言をとり払われて、副語として——「より大きい」など——用いられるようになった; 2) 関係代名詞の直訳のための「ところの」という表現形式ができあがった; 3) 「あろう」という推量の動詞接尾辞(いわゆる助動詞)は、口語では連体形が用いられなくなっていたものであるが、西洋語の未来形の訳語に充てられて、口語としてはなじまない連体形が——例えば「読むであろう人」などが——しきりに用いられるようになった; など、文法構造の一部にも及ぶ変化が生じている。今日の日本語における明治以降の西洋語の影響は、以上のような、表現形式の上で具体的に指摘できるものばかりでなく、西洋文法の学習と知識が、われわれの言語意識そのものにまで及んでいる類の影響をも、日本人自身の内省・自省によって問題にすることができ、おそらく言語における干渉現象のためには、豊かな実りを約束している領域である可能性であろう。文の観念・未来時称・受動態などについて、われわれは西洋文法に誤られて、われわれ自身の国語の文法を誤解している疑いもなくはないと私は考えている。

5. 結び。結局この小考で私が述べようとしているのは、諸言語の戸籍調べというか、系統上の分類という問題は、単に系統論のみの立場から何語族に属するかを問うだけでは、おそらく多くの場合に不充分であって、かなり多くの言語について、そのそれぞれの言語史を、形成論の立場から再検討することが必要であろうと言うにつきよう。そしてそのための一般論ないし基礎論として、もっとも広い意味の二言語併用における干渉現象の解明の欠くべからざることを論じて、手近な例として、1) 混合言語、特に *créole* 型の言語の問題と、2) パルカンの諸言語に認められるところの、おそらく干渉の結果と断じて差支えない収束 *convergentiae* と、3) 日本語自身の史前の形成過程および過去におこり、かつ現在も

進行中である干渉現象とを挙げてみたが、言語干渉研究の素材たりうる二言語間の交渉の事実は、言うまでもなくこれらの三つに尽きるものではなく、過去にも、現在にも、至るところに、いくらでも見出だすことができよう。日本人の目から見れば、西洋の諸言語という一つの集合そのものが、バルカンの諸言語の場合を拡大したような相互干渉の網の目を形づくっていて、このような観点から、ヨーロッパの諸言語を問題にしてみることも充分興味深く、有益な課題であろうし、上に紹介した橋本氏の研究も、氏自身による今後の展開からさらに多くのものが期待される。

最後になお一言を申し添えるならば、言語干渉論と形成論とが確立された暁、それは必ずや印欧言語学にも何ほどかのものをもたらすであろうと期待されることに言及しておきたい。印欧共通基語の諸部族が、ヴォルガとドンの両河間地 *mesopotamia* の原郷から、それぞれに東・南・西へ移動して行ったとき、その行先の各地にはまたそれぞれに固有の言語を用いる先住民族がいたはずである。アナトリアやインドの場合は、そうした先住民族の言語について、程度の差こそあれ、少なくとも大小の情報が得られるが、ヨーロッパへ移動して行って、ケルト・ゲルマン・スラヴなどの民族を形成することになった部族の場合は、移動先の先住民族の言語は、おそらく地名にとどめられた微かな痕跡を除いて、まず完全に消えてしまっている。しかしながらここに、一般理論としての干渉論と形成論とが次第に確立されて来るならば、ゲルマン・スラヴ等の各語派の形成について、おぼろ気ながらも移動先の言語から何を仰いでいるかなどの見通しが立つこともあり得よう。はたして期待通りの成果が得られるならば、印欧言語学もなお一段と詳密の度を加えることになるというものである。

初めてソシュールと印欧語比較文法とに接した日から 40 年をこえる月日が流れ、その間に古典的比較文法は、はたして絶対に誤りもなく、欠陥もない体系であるかという疑いが私自身の中に兆して来た。このような疑いの声は、私ひとりだけではなく、方方からあがり始めているようである。

日本語を母国語としてもつことは、既成の言語学を見直す上で、一つの強みたり得ることもかも知れない。

亡くなられた小林先生は、その直接間接の御指導によって、日本の言語学に大きな刺激を与えられ、また多くの後進後輩を育てられ、斯学の水準を高める上で測り知れぬ貢献をされたが、その後をお受けするわれわれ日本の後進は、世界の言語学のために寄与するところありたいものである。

文献・最後に小考に関連する著書論文を一括して挙げておく：

江実、日本語はどこから来たか 1974（鈴木武樹編「日本文化の源流」所収）

アルタイ言語学とオセアニア言語学との接触 1974（言語 III-1, 大修館書店）

西田龍雄、中国江南地域の非難民族とその言語 1975（国分直一編「倭と倭人の世界、毎日新聞社」所収）

橋本萬太郎、言語類型地理論 1978（弘文堂）

比較方法の問題と限界 1978（言語 VII-11, 大修館書店）

村山七郎、日本語の起源 1973（弘文堂、大林太良と共著）

日本語の語源 1974（弘文堂）

日本語の研究方法 1974（弘文堂）

- 国語学の限界 1975 (弘文堂)
 日本語系統の探究 1978 (大修館書店)
 原始日本語と日本文化 1979 (三一書房), 国分直一と共著)
 日本語の誕生 1979 (筑摩書房)

次に、筆者自身の関連する論文を挙げる：

- 印欧言語学の一問題 1948 (外事論叢 II 2-3, 神戸外専)
 ユーラシア語族の可能性 1971 (神戸学術出版)
 ユーラシア語族の概念 1973 (大阪大学東南アジアセンター彙報9)
 日本語とチベット語 1974 (季刊・人類学V-1)
 言語類型学の方法 1975 (言語文化研究 I, 大阪大学言語文化部)
 ユーラシア語族の可能性 1978 (言語 VII-11, 大修館書店)

Weinreich と Sandfeld の研究については、本文中に記したので改めて挙げない。バルカンの諸言語の示す相互干渉と収束については、例えば、Linguistique balkanique という季刊誌が Sofia から出ている。ただし収載論文のテーマは、バルカンの言語の収束のみには限らない。

記述が前後するが、混成言語については：

- P. Perego, *Les sabirs* 1968.
Les créoles 1968.

の二論文を挙げる。いずれも A. Martinet 監修の *Le langage* 所収である。

チャド諸語・セム＝ハム諸語については：

- D. Cohen, *Les langues chamito-sémitiques* 1968 (A. Martinet, *Le langage*)
 I. M. Diakonff, *Semito-hamitic languages* 1965.
 Ch. H. Kraft, *Hausa* 1973.
 S. Brauner u. M. Ashiwaju, *Lehrbuch der Hausa-Sprache* 1965.

によった。

筆者は、かねてから行く行くは脳生理学者との協同による言語中枢での干渉の機構の研究が問題になって来ようと考えていたが、すでに着手はされている模様で、数日前、

- M. L. Albert & L. K. Obler, *The Bilingual Brain* London 1978
 なる書物の広告を受け取った。